Vol.161　市史編纂（さん）だより

わがまち歴史散歩

饒舌（じょうぜつ）な「文字史料」と寡黙な「考古資料」

○二つの異なる史資料

今回から6回にわたって、池田市域の持つ歴史的特質について、主として「考古資料」を使って紹介していきます。

ところで、歴史は、二つの性格の異なる史資料の分析をとおし、その総合的な研究によって明らかにされてきました。一つは、文字として残された史料「文字史料」、もう一つは、モノとして残された資料「考古資料」です。そこで、1回目となる今回は、「文字史料」と「考古資料」の違い、それぞれの有用性と限界についてお話しします。

○饒舌な「文字史料」

「文字史料」は、いつ、だれが、どこで、…、そして、中にはその結果によって現れる感情までと、過去のさまざまな事象について饒舌に語りかけてくれます。そこから導き出される内容は高い具体性を持っています。また、時代が新しくなるにしたがって、現在まで残る同時代の「文字史料」も飛躍的に多くなっていきます。

ところが、「文字史料」は、文字が使用されるようになった時代以降に、文字を使用できるヒトが、文字として残す必要があると判断したコトのみが記録の対象となっています。つまり、記録の対象にならなかったことが抜け落ちてしまっていることになります。また、同時代ではなく過去にさかのぼった内容や意図的な改変が加わることも想定されます。

写真左：「池田市娯三堂古墳（4世紀）出土画文帯神獣鏡」、写真右：『日本書紀』（寛文9：1669年刊）。どちらも市立歴史民俗資料館蔵。

さらに、文字は、文字を刻む石や金属、あるいは書く木や紙といった媒体が必要になることから、いくつもの幸運が重なったことで、現在にまで受け継がれてきたものといえます。

○寡黙な「考古資料」

一方の「考古資料」は、人間社会が存在した限り、普遍的に見出すことができます。この点が「文字史料」と大きく異なるところです。つまり、人間のさまざまな行為によって生み出された全てのモノを対象にすることができます。何らかの目的を持って生み出され使用されたモノは当然のこととして、極端にいうと、生理的な行為の結果も含まれることになります。例えばびろうなお話ですが、排便（糞石：排泄（せつ）物が化石化したもの）も考古学的な分析の対象になっています。

しかも、そのモノが生み出された時代、つまり同時代の資料である点において大きな力を持つのです。むろん、全てのモノが残るわけではなく、素材によっては長く残らないモノや、そもそも未発見のモノも存在しているはずです。

しかし、それを含めても、「文字史料」に比べその対象となる資料は余りあるものです。

ところが、多くの「考古資料」が残されていながら、それらは古墳に副葬された、あるいはごみ捨て場に捨てられたといった、その最終の姿でしか捉えることができません。なぜそのモノを必要としたのか、どのようにして作られ使用されたのか、それによってどのような結果が得られたのかといった過程については何も語ってくれない、寡黙な資料なのです。

○考古学のだいご味

このように、自分からはしゃべりだすことがないモノに何らかの方法を用いてしゃべらせようとするのが考古学といってもよいかもしれません。次回からは、いくつかのキーワードを設けて、自らはしゃべらない寡黙な「考古資料」を使って、「文字史料」として記録の対象にならなかった時代、あるいは事象に注目して考えます。

（市史編纂委員会委員・田中晋作）

◆問い合わせは社会教育課
☎754・6674

Vol.162　市史編纂（さん）だより

わがまち歴史散歩

旧石器時代：「道具」から復元される人びとの生活

○人びとを取り巻く厳しい自然環境

日本列島で人びとの生活が始まったのは、今から4万年前にまでさかのぼるといわれています。それから、約2万5千年間、土器の使用が始まる縄文時代までの間を後期旧石器時代としています。

この時代は、寒冷な乾燥した気候で、平均気温は現在よりも7、8度低かったといわれています。北海道を除くと、草原とスギやマツなどの針葉樹林、コナラやハンノキなどといった広葉樹が含まれた針広混交林が広がり、今は絶滅したナウマンゾウやオオツノシカといった大型草食獣などが生息していました。

○残された人びとの痕跡

現在、後期旧石器時代の遺跡数は、全国で約1万、大阪府内では400余りで、後の時代と比べて最も少なくなっています。池田市内では、中国道池田ＩＣ付近に広がる宮の前遺跡や五月山南麓の伊居太神社参道遺跡など、5カ所の遺跡が知られています。これらの遺跡は、北摂山地の南麓に点在する遺跡群に含まれています。

時代が長いにもかかわらず遺跡数が少ないことは、人びとの生活の痕跡が残りにくいことに加え、後述するように移動生活をしていたことにもよります。さらに、当時の日本列島の人口が2万人程度であったと推定されていることもその要因の一つです。

○想像を超える人びとの移動

後期旧石器時代では、獣骨や木を素材にした道具の使用も考えられていますが、見つかるのはほぼ石器に限られます。その中で主体を占めるのがナイフ形石器で、槍（やり）の先に付けたり、切ったり削ったりと、狩猟に関するさまざまな場面で使用できる石器です。

道具の良し悪しは、素材と製作技術によって決まります。鋭利な石器を得るためには、それに適した石材が必要です。近畿地方では、大阪府と奈良県の境にある二上山周辺だけで手に入るサヌカイト（安山岩の一種）が主として使われています。二上山周辺では、石器を製作した遺跡も見つかっており、製品、あるいは素材が移動していたことが分かっています。さらに注目すべきことは、共通の技術で石器が製作されていることです。すでにこの時代に、素材や製品はもとより、技術や知識が私たちの想像を超える範囲で人びとに共有されていました。

ナイフ形石器（宮の前遺跡：歴史民俗資料館）

二上山遠望（大阪側から）

○道具と人びとの生活

ところで、私たちの生活にとって重要な役割を担っているのが道具です。どのような道具が、どのように使われていたかが分かれば、人びとの生活を復元する手がかりになります。

この時代は、木の実なども食料にしていたと思いますが、植物を加工、調理する道具が見つかっていません。これは、食べることができる植物が限られていたことも関連しています。このことから、当時の生活が狩猟を主体としたことが分かります。

また、狩猟の道具が槍に限られていることから、見つけやすく、動きが緩慢な大型草食獣が獲物として最適であったことになります。大型草食獣は多くの食べ物を必要とするため、季節に応じて広大なエリアを移動しながら生息しています。とすると、人びとはこれら大型草食獣を追う移動生活を送っていたということが導き出されます。当時の人びとが持った道具から、特定の獲物に絞った、効率の高い極めて合理的な行動が復元できるのです。市内の遺跡は、その移動途中に人びとが残した生活の痕跡であったのでしょう。

（市史編纂委員会委員・田中晋作）

◆問い合わせは社会教育課
☎754・6674

Vol.163　市史編纂（さん）だより

わがまち歴史散歩

縄文時代：豊かな森の住民たちと土器の発明

○現代に近い環境へ

今から約1万6千年前ごろを境に、人々を取り巻く自然環境が寒冷で乾燥した大陸性気候から、安定した温暖で湿潤な海洋性気候へと変化し始めました。海面が徐々に上昇し、現在の日本列島の原形が形成され、植物資源の豊富な温帯落葉・常緑広葉樹林が広がるようになりました。私たちの住む猪名川流域でも、尼崎市域や豊中市域の南半分まで海が及んでいたことが分かっています。

○多様化した食料資源

この環境の変化は、それまでの人々の生活を根底から覆すような大きなものでした。森は、クリ・トチ・ドングリ・クルミといった植物資源やシカやイノシシといった動物資源を、大陸棚が発達し広大な干潟を生み出した海やそこに流れ込む河川は、魚介類といった水産資源をと、後期旧石器時代とは比べものにならない豊かで多様な食料資源を人々にもたらすことになりました。例えば、豊中市の穂積遺跡で発掘された縄文時代の海底跡で、80種以上の貝の化石が足の踏み場もない状態で見つかったことも、その豊かさの一端を示しています。

縄文時代の海底から見つかった貝の化石
（豊中市穂積遺跡：同市教育委員会提供）

後期旧石器時代の人々を、特定の大型獣を狩猟対象としていた「スペシャリスト」とすると、縄文時代の人々はこのような多様な食料資源を狩猟採集する「ゼネラリスト」と表現することができそうです。このような変化は、大型獣を追って広い範囲を移動することを余儀なくされた生活から、一定の範囲に定着する生活をもたらすことになりました。半地下式で暖房効率の高い竪穴式住居が生まれたのもこの変化に連動した現象の1つです。

○新たな道具の発明

縄文時代に現れた新たな生活は、新たな道具を生み出しました。例えば、食料資源に関するものを見てみると、トチやドングリなどを、加熱や水さらしによって「あく抜き」をするための土器、森に生息する動きの早い中・小型獣を捕るための弓矢や、釣り針・網・モリ・ヤス、さらにヤナなどの狩猟具や漁労具などです。

また、道具ではありませんが、犬の出現も見逃すことができません。犬の活用によって、集団猟だけではなく個人猟も可能になりました。遺跡の中で見られる丁寧な犬の埋葬は、生活を共にする忠実な家犬であり、猟犬であったことを物語っています。

○土器の機能と人口の増加

ところで、日本の考古学では、縄文土器の発明をもって縄文時代の始まりとしています。土器は「あく抜き」だけではなく、煮沸調理を可能にした道具でもあります。煮沸する、この機能によって食材の範囲が広がるとともに、消化吸収を促進させるなど、縄文人に安定した食生活をもたらすことになりました。少し大げさな表現になりますが、土器が持った機能は、社会発展の基盤となる「人口の増加」への道を開いた、まさに時代を画する大きな発明であったわけです。

縄文土器の出土状況
（池田城跡：府教育委員会提供）

○豊かな森の住人たち

縄文人たちは、自分たちを取り巻く自然環境を破壊しない限り、その恩恵を確実に得ることができることを知っていたのでしょう。池田市域では、池田城跡などで縄文土器の出土が知られています。ある時は五月山の、またある時は猪名川の、さらにこれに続く海の恵みを得ることができたはずです。環境の破壊と引き換えに得られた「現代の豊かさ」、豊かな森の住人たちに少し学ぶ必要がありそうです。

（市史編纂委員会委員・田中晋作）

◆問い合わせは社会教育課
☎754・6674

Vol.164　市史編纂（さん）だより

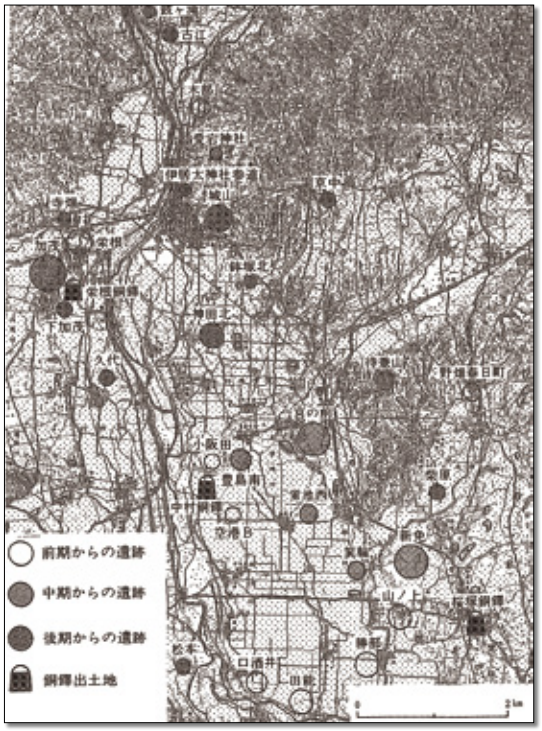
わがまち歴史散歩

弥生時代：動かなくなること、動けなくなること

○農耕の始まり

稲作を中心にアワ・キビなどの畑作を複合させた食糧生産である農耕が、中国大陸から朝鮮半島を介して日本列島にもたらされたことを弥生時代の始まりとしています。その背景には、当時の気候の寒冷化が朝鮮半島南部から日本列島への「ヒト」の移動を促したことがあると考えられています。

現在のところ、前方後円墳が出現する3世紀半ばから後半までを弥生時代としていますが、始まりについては紀元前6世紀前後と、紀元前10世紀前後とする2つの説が対立しています。ここでは、前者の立場で進めたいと思います。



猪名川流域の弥生遺跡
（『新修池田市史』第1巻137頁）

○自然環境の改変と道具

農耕の始まりは、自然と共生してきた縄文時代までにはなかった、開墾という自然環境の改変の始まりを意味します。現在に至る開発の原点がここにあります。

また、もたらされたのは、稲などの栽培植物だけではなく、田畑の耕作から、栽培、収穫、脱穀、調理はもちろんのこと、衣食住に関わるさまざまな知識や技術、そしてこれらを具体的な形にする各種の道具類が含まれています。その主役は木製品です。伐採から加工に至る過程には、朝鮮半島から持ち込まれた各種の石斧やさまざまな石器が使用されました。このような変化は、農繁期と農閑期というサイクルからなる、近代化以前の日本の生活様式と農村風景を生み出すことになりました。

○資源をめぐる確執

生産性の高い稲作を中心とする農耕は、人々に安定した生活をもたらした半面、年間を通して集約性の高い労働を必要としたために、田畑に縛りつけられた動かなくなる、動けなくなる生活を強いることになりました。意外に聞こえるかもしれませんが、現在の都道府県・郡・市町村の原形がこの時代に出来上がったといっても良いと思います。また、継続的な農耕には、耕作地やかんがい施設などの維持、管理に組織的な協業が欠くことができないことから、生活の安定に伴う人口の増加とも相まって、集落や地域を統合して大型化していく社会の仕組みも生まれてきました。

朝鮮半島からの「ヒト」の移動はその後も断続的に続き、あわせて青銅器、さらに鉄器と、より高い機能を持った多様な道具がもたらされることになりました。その中には、殺傷能力を持った金属製武器も含まれています。耕作地に適した土地や優れた金属製の道具は生産力の優劣に直結するものであり、例えば墳墓の副葬品にあらわれた格差は、これら限られた資源をめぐる確執が集団内のあるいは集団間の格差を生む要因になっていたことを示しています。

○猪名川を遡（そじょう）上して拡大する農耕社会

現在、本市域で見つかっている最も古い弥生時代の遺跡は、前期末（紀元前3世紀ごろ）の木部遺跡（木部町）です。猪名川流域では、下流域に木部遺跡に先立って田能遺跡（尼崎市・伊丹市）や勝部遺跡（豊中市）が出現していることから、北部九州地域にもたらされた農耕は時を置かず東進し、これらの遺跡を起点にして猪名川を遡上して拡大していったことが分かります。中期（紀元前4世紀ころ）には、石橋4丁目から住吉1・2丁目一帯に広がる複数の小規模な集落から構成される宮の前遺跡が形成されています。対岸には大規模な加茂遺跡（川西市）が出現し、猪名川流域が複数の有力集団を核にして展開する本格的な農耕社会へと変貌していった過程を復元することができます。

（市史編纂委員会委員・田中晋作）

◆問い合わせは社会教育課
☎754・6674

Vol.165　市史編纂（さん）だより

わがまち歴史散歩

古墳時代：古墳によって体現された社会秩序

○古墳の出現

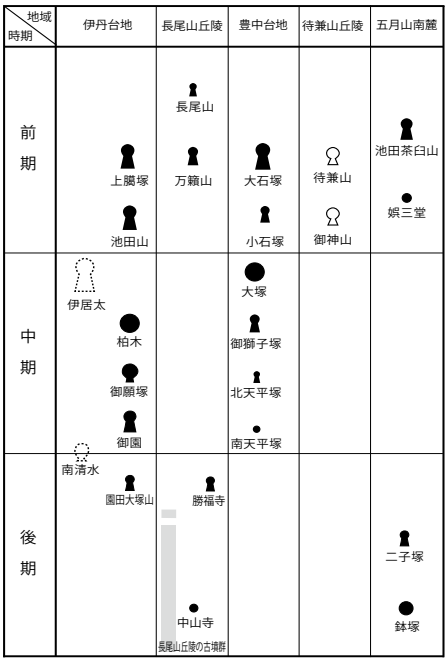
3世紀半ば、大和盆地で巨大な前方後円墳が出現します。以後、約400年間にわたって、16万ともいわれる古墳が築造されました。これは、日本列島の歴史にあって特筆すべき現象で、当時の社会像を描き出す極めて有用な手がかりになっています。

○古墳時代の猪名川流域

では、古墳からどのような社会像を描き出すことができるのかを、池田市域を含む猪名川流域を取り上げて紹介してみたいと思います。

左図に示したように、古墳時代前期（4世紀）には前方後円墳を築造することができる力を持った勢力が、猪名川流域という限られた範囲に、少なくとも5つ併存していたことが分かります。これらの勢力のうち、長尾山丘陵の勢力が他の勢力に先駆けて力を持つようになり、それぞれ2世代程度、継続して古墳が築造されています。ちなみに、最大の豊中市大石塚古墳の規模が約90m、本市池田茶臼山古墳（五月丘1丁目）が59・5mで、当時としては中規模の古墳に当たります。

図：猪名川流域の古墳の推移



実線：墳丘形態不確定、破線：古墳であるか不確定

ところが、中期（5世紀）に入り、猪名川流域では大きな変化が起こります。前期に見られた長尾山丘陵・待兼山丘陵・五月山南麓の勢力では中期までに古墳の築造が停止または大きく後退し、猪名川を境にして東岸地域の豊中台地の勢力、すなわち豊中市桜塚古墳群東群と、西岸地域の伊丹台地の勢力の伊丹・尼崎市猪名野古墳群の2つの勢力に集約されます。

後期（6世紀）になると、東岸地域では古墳の築造が停止し、西岸地域でも後期前半（6世紀前半）に尼崎市園田大塚山古墳を最後に古墳の築造が停止します。一方で、ほぼ同じころ、中期に古墳の築造が停止していた長尾山丘陵で新たに川西市勝福寺古墳が築造されます。このように、後期前半の猪名川流域では、既存勢力と新興勢力の併存が注目されますが、共に後続古墳の築造が停止します。

その後、中期以降古墳の築造が停止していた五月山南麓で猪名川流域最後の前方後円墳である本市二子塚古墳（井口堂1丁目）が新たに築造され、後期後半または終末期（6世紀末～7世紀初頭）に、共に巨石横穴式石室を持つ本市鉢塚古墳（鉢塚2丁目）と宝塚市中山寺古墳（中山白鳥塚古墳）が出現します。

以上のような古墳の推移から、猪名川流域では最終的には東西両岸地域がそれぞれ一つの有力勢力のもとにまとまっていく様子を見て取ることができます。とはいえ、その道のりは特定の有力な勢力が継続して成長を遂げていくといった平坦なものではなかったようです。

○政権交替に連動した動静

ところで、古墳時代にあって時期別に最大規模を持つ前方後円墳を並べてみると、天理市大和・柳本古墳群→奈良市佐紀古墳群→堺市百舌鳥古墳群、藤井寺市・羽曳野市古市古墳群→高槻市今城塚古墳→橿原市五条野丸山古墳という順序で移動しています。この現象をヤマト政権内で主導権の交替があったことを示すものとする考えがあります。それぞれの移動時期を見ると、猪名川流域で見た古墳の動静と合致することが注目されます。あくまでも一つの仮説ですが、政権内の主導権の交替が猪名川流域を含む各地域の勢力の推移と連動していたことを導き出すことができそうです。

私たちが池田市内で目にする古墳は、市域や猪名川流域で完結するものではなく、この地域が古墳によって体現された当時の社会秩序の中に組み込まれていたことを物語っているといってもよいでしょう。

（市史編纂委員会委員・田中晋作）

◆問い合わせは社会教育課☎754・6674